

な ん で や ね ん

発行責任者 倉橋 忠

No. 2 6

飢え死にした兵士たち

日中戦争で戦った兵士たちと食料

中国北部で始まった日中戦争は、中国中部の沿岸部から中国の奥深くまで拡大した。それまで以上に日本軍は戦力が必要になった。

日本軍は多くの若者を兵士として派遣した。そのために、日本国内では農民生産の落ち込みや、工業生産の縮小は避けることの出来ない状態になり、戦場の拡大により多くの食料と武器・弾薬を送り続ける必要が生じるという矛盾が大きくなった。

多くの資源や食料があり、多くの人民が住む中国大陸でも、日本兵は飢えて、自分達の飢えをしのぐために、地域住民の食料を奪ったと言う報告がある。

藤原彰氏は、日中戦争の際に、第二十七師団の支那駐屯歩兵第三聯隊第三中隊長として多くの兵を指揮した人である。その藤原氏は戦後に『餓死した英霊たち』を著して、日中戦争で兵士たちの経験した飢餓地獄を調査・報告している。

藤原氏の部隊は、日本軍の自動車が走れるように道路補修をした。歩兵部隊なので、工事の器材は、兵士が背囊¹⁾につけている小型のスコップか鍬しかない。土を運ぶにも、籠に入れて肩に担いで行った。道路はとぎれとぎれになり、橋も跡形もなく破壊されていた。雨が降れば泥沼となった。昼間は、頻繁に空襲を受ける。従事した兵の体力の消耗は甚だしかった。それなのに、わずかな主食が補給されるだけで、その他の食糧は徴発²⁾するしかなかった。ところが、地域は「戦場慣れをした第一線の第三、第十三の両師団が散々に荒らして通った後で、どの部落もまったくの廢墟と化して何一つ残っていなかった」³⁾。この部隊は多数の栄養失調死者を出した。

第十三師団の歩兵第六十五聯隊は、上海から南京へ移動する間の農村の食料を奪いつくした。「兵士たちの日記をみると、上海から南京への道中は、毎日が食糧徴発の記録である。それが兵士たちの最大関心事だった」⁴⁾ことがわかる。

ちなみに、この第十三師団歩兵第六十五聯隊は「南京東北方の幕府山附近で1万数千の捕虜を捕まえ、(中略)捕虜を処分した」⁵⁾。

1) はいのう: 背中に負う皮製などの四角な入れ物。行軍の時などに身の回り品その他を運ぶのに使う。

2) ちょうはつ: (戦時などに軍が人民から物資・人力を)強制的に取り立てること。

3) 藤原彰『餓死した英霊たち』青木書店 2001年 p. 123

4) 前掲 藤原彰『餓死した英霊たち』p. 126

5) 前掲 藤原彰『餓死した英霊たち』p. 126

太平洋の島々で餓死していった兵士たち

進軍した兵士たちの食生活は決して豊かなものではなかった。とくに悲惨^{ひさん}だったのは、孤立^{こりつ}した戦場の、餓死^{がし}したり、栄養失調^{えいようしつちよう}で戦病死^{せんびようし}した兵士たちであった。

ミッドウェー海戦^{かいせん}(1942年6月)で敗れた後は、海上^{やぶ}も空もアメリカ軍が支配^{あと}した。太平洋戦争でアメリカ軍の反攻^{はんこう}が開始され、戦局転換^{せんきよくてんかん}のきっかけになったのは、開戦2年目の1942年8月から1943年1月にかけての、ソロモン諸島のガダルカナル島での戦いであった。ガダルカナル島で、日本軍は3万人の将兵で半年間戦った。その結果たどり着いたのは、戦死者約5000人、餓死した者が約15,000人であり、後に送られた援軍^{えんぐん}に救出^{きゆうしゅつ}されたのは約10,000人だった。ガダルカナル島は「餓島」と呼ばれた。

その状況をかろうじて生き残った一人の青年将校^{せいねんしょうこう}は、次のように書いている。

「12月27日(1942年)

今朝もまた数名が昇天^{しょうてん}する。ゴロゴロ転がっている屍体^{したい}に蠅^{はえ}がぶんぶんたかっている。

どうやら俺^{おれ}たちは人間の肉体^{にくたい}の限界^{げんかい}まできたらしい。

生き残ったものは全員顔が土色^{つちいろ}で、頭の毛は赤子の産毛^{あかご うぶげ}のように薄くぼやぼやになってきた。黒髪^{くろかみ}が、ウブ毛^{うぶけ}にいつ変^{かわ}ったのだろう。体内にはもうウブ毛しか生える力が、養分^{ようぶん}がなくなったらしい。髪^{かみ}の毛が、ボーボーと生え……などという小説を読んだこともあるが、この体力では髪^{かみ}の毛が生える力もないらしい。やせる型の人間は骨^{ほね}までやせ、肥える型の人間はブヨブヨにふくらむだけ。歯^はでさえも金冠^{きんかん}や充填物^{じゅうてんぶつ}が外れてしまったのを見ると、ポロポロに腐^{くさ}ってきたらしい。歯も生えていることを初めて知った。(後略)」⁶⁾

戦いの場は、同じソロモン諸島のブーゲンビル島に移った。ブーゲンビル島で、何とか生き帰った兵士たちには食べるものは何もなかった。そこで、銃^{じゅう}を捨て、荒れ果^あてた耕地^{こうち}や密林^{みつりん}の開墾^{かいこん}につとめた。その間、補給^{かん ほきゅう}された食料は、4月に米100グラム、5月に60グラム、6月以降は何もなかった。あとは現地^{げんち}の物資^{ぶつし}を利用するしかなかった。「兵士たちの中には、住民がわずかに所有している食物を、半ば強制的に^{なか きようせいてき}取り上げるものも出てきた。木の芽、草の根、食べられるものはすべて食べた。海の魚はとりたくても敵機^{てつき}が絶えず哨戒^{しょうかい}するし、爆薬^{ばくやく}は将来の作戦を考えればこんなことに使えなかった。小川の魚はすぐにとりつくされた。蛋白質^{たんぱくしつ}の給源^{きゅうげん}は「トカゲ」であり、蛇^{へび}であり、鼠^{ねずみ}、「バッタ」の類^{たぐい}に及ばざるを得^{およ}なかった。調味料^{え ちょう みりよう}として、塩^{えん}を夜間^{やかん}、海水^{かいすい}を煮^にて作った(後略)」⁷⁾と、飢餓^{き が じようたい}状態^{ほうこく}が報告されている。

6) 前掲 藤原彰『餓死した英霊たち』p. 20

7) 前掲 藤原彰『餓死した英霊たち』pp. 29-30